

72の法則ってな～に？

文：児玉 晋

板書例

72の法則 … 元本が何年で2倍になるかを計算できる数字

$$72 \div \text{金利}(\%) = \text{2倍になるまでかかる年数(年)}$$

例① 0.1%で運用した場合 $72 \div 0.1(\%) = 720(\text{年})$

例② 10年後に2倍にしたい場合の金利x $72 \div x(\%) = 10(\text{年})$ $x = 7.2$

例③ 金利18%でお金を借りた場合 $72 \div 18(\%) = 4(\text{年})$ 4年で借金が2倍に

何年で2倍？



72の法則でリスク、リターンのおおよそをつかむ数的感覚を身につけたい

72の法則は、投資した元本が何年で2倍になるかを計算できる数字として知られています。計算式は簡単で、72を金利で割ると、2倍になるまでにかかる年数が計算されます。まずは、この法則の前提として、計算結果は概算値であることと利息が「複利」*1で計算されていることに注意してください。

では、早速ですが、計算してみることにします。

例) $72 \div 0.1(\%) = 720\text{年}$

0.1%の金利で運用すると、720年で投資元本が2倍になるという試算になります。ライフプランに置き換えると、金利の低い定期預金や個人向け国債などの元本保証商品で2倍にすることは非現実的ということがわかります。では、予定する投資期間で元本を2倍にするために必要な金利は、どのように求められるのでしょうか。

以下のように式を操作すれば、簡単に求めることができます。

例) 10年後に2倍にしたいと考える場合の金利x%を求める計算式

$$72 \div x(\%) = 10\text{年} \rightarrow \text{必要な金利は、} x = 7.2 \text{ となります。}$$

つまり、毎年7.2%で10年間複利運用できたら、投資元本が2倍になるという試算が成り立ちます。たしかに簡単で便利な計算ですが、なぜこのような計算が成り立つのでしょうか。

*1「複利」については、メルマガ Vol.23 参照

例) 金利を $x\%$ 、運用期間を y 年とした時に投資元本が 2 倍となる計算式

$$(x+1)^y=2$$

対数である y を取って変換すると、 $y \ln(x+1)=\ln 2$ となり、展開すると答えは $0.693\dots$ となります。ここから先は諸説あるようで、69 の法則にするよりも、69 に近い数字で使いやすいように約数が多い 72 が使われるようになったとか……。

この 72 の法則は、逆の見方をすると借金がどのくらいの期間で 2 倍になるかと置き換えることもできます。例えば、クレジットカードのキャッシングサービスを利用して、金利 18% の条件でお金を借り入れた場合を考えてみましょう。

例) 金利 18% でお金を借りた場合

$$72 \div 18(\%) = 4 \text{ 年} \rightarrow 4 \text{ 年で借金の残額が 2 倍になります。}$$

もっとも、上記の例は 4 年間一度も元金を返済しなかった場合ということになりますが、返済が滞った場合に、どの程度負担が増えていくかという目安にもなります。借入金額が多ければ大変な負担になりますので、この法則を知ることによって危険を回避できるかもしれません。

さて、改めて 7.2% という数字に着目してみたいと思います。先ほど 7.2% で毎年複利運用すると、10 年後に元本が 2 倍になることがわかりました。しかしながら、現在の日本における元本保証の定期預金や個人向け国債等の利率と比較すると、大きな開きがあります。一方で、株式や投資信託のような金融商品の中には、7.2% 以上のリターンが期待できるものも存在しますが、当然それにはリスク（利益や損失の不確実性）^{※2} も伴います。

その商品が自分のライフプランを実現するために適合しているかを判断するときに、「72 の法則」を使って、リスク・リターンのおおよそをつかむ数的感覚を身につけておくといいかもしれません。

※2 「リスク」については、メルマガ Vol.28、Vol.32 参照

※内容については万全を期しておりますが、配信時現在の情報を基に執筆していること及び執筆者個人の見解も含まれていることをご理解のうえ、ご利用ください。